

Sato Project

Sato Project

農業が環境を破壊するとき —ユーラシア農耕史と環境—
「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤プロジェクト (加藤早稲子) e-mail: sato@chikyu.ac.jp

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



佐藤プロジェクト第二回国際植物考古学シンポジウム
『稲作の起源とその伝播—植物考古学と遺伝学の視点から』の報告

細谷 葵 (総合地球環境学研究所)

佐藤プロジェクト第二回国際植物考古学シンポジウム 『稲作の起源とその伝播—植物考古学と遺伝学の視点から』の報告

細谷 葵（総合地球環境学研究所）

2007 年度に開催した佐藤プロジェクト国際植物考古学シンポジウム『ユーラシア植物考古学の現在』から中一年おいた今年 2009 年 8 月 30 日（日）～31 日（月）に、第二回国際植物考古学シンポジウム『稲作の起源とその伝播—植物考古学と遺伝学の視点から』を、地球研にて開催しました。前回は、ユーラシア大陸全般の植物考古学の最新情報を交換し議論することを目的としましたが、今回はテーマを稲作の起源と伝播の問題に絞りました。

稲作の起源、伝播については、最近多くの新しいデータが得られています。たとえば、中国長江流域における初期稲作社会の生活では、稲作社会といっても野生食用植物利用のウェイトが高い状態が長く続き、コメが主要食料になるには何百年もの時間がかかったことが明らかになりつつあります (Fuller ほか『Science』512、2009)。また、稲作は東南アジアへ伝播したのか、それとも東南アジア起源かという論争も繰り広げられました (Fuller & Sato 『Nature Genetics』40-11、2008)。

これら最近の議論は、学際性が高いこと、とくに遺伝学と植物考古学が同じ土俵で議論を戦わさねばならなくなってきたことが特徴的です。このような現状を踏まえ、佐藤プロジェクトの本領である遺伝学と考古学のコラボを全開にして、稲作起源について議論を展開してみようというのが、今回の趣旨です。



RIHN Sato Project International Archaeobotany Symposium

'Origin of Rice Agriculture and Its Diffusion to Southeast and East Asia'

Sunday, 30 August - Monday, 31 August 2009
At: The Lecture Hall, Research Institute for Humanity and Nature (RIHN)

Sunday, 30 August 9:30~17:00

■ Session 1: General View on Early Rice Agriculture in Archaeobotany and Genetics

Dorian Fuller, Michael Purugganan, Ryuji Ishikawa

■ Session 2: Origin of Rice Agriculture and Uses of Wild Food Plants

Zhiqun Zhao, Shiroichi Nakamura, Junko Hata

Monday, 31 August 9:50~17:30

■ Session 3: Diffusion of Rice Agriculture in East and South East Asia

Makuro Kajala, Marco Madella, Steven Weber, Chieki Mito, Sung-mo Ahn, Yo-ichiro Sato

Admission free

Language: English

Organised by: RIHN Sato Project

発表者は、前回シンポジウムにも参加いただき、ある意味佐藤プロ常連さんとも言える、ドリアン・フラー氏（ロンドン大学 UCL）、マイケル・プルガナン氏（ニューヨーク大学）、趙志軍氏（中国社会科学院）、羽生淳子氏（カリフォルニア大学バークレー校）、マルコ・マデッラ氏（スペイン科学研究所）、スティーブン・ウェバー氏（ワシントン州立大学）。今回地球研デビューを飾った安承模氏（圓光大学校）、ムクンド・カジャレ氏（デカン大学）。それに佐藤プロメンバーの石川隆二氏（弘前大学）、中村慎一氏（金沢大学）、佐藤洋一郎氏（地球研）、武藤千秋氏（地球研）を加えた 7 カ国 12 名です。中村氏の大学用務による不在（細谷代読）、参加予定だったアンドリュー・フェアバーン氏（クイーンズランド大学）の急病によるキャンセルなど残念なこともありましたが、前回シンポジウムに勝るとも劣らぬ、各分野最先端の研究者たちに恵まれたシンポジウムとなりました。

シンポジウム 1 日目は、地球研副所長・秋道智彌氏からの開会のお言葉で始まりました。第一部「植物考古学と遺伝学からみる初期稲作の諸問題」では、冒頭にふさわしいフラー氏の壮大な問題提起の発表を皮切りに、プルガナン氏の遺伝学の立場から見たイネ栽培化の問題、石川氏の東北地方の縄文—弥生遺跡から得た最新成果の報告が発表されました。小ディスカッションと昼休みを経た第二部「稲作の起源および野生植物の利用」では、趙氏からの中国初期稲作遺跡の調査現状を紹介した貴重な報告がなされた後、中村氏からは長江流域でいかに湿地帯への適応戦略のひとつとして稲作が始められたか、羽生氏からは縄文時代の植物利用が集約化していく中で栽培活動も始まった可能性について、最新の考古・植物考古資料に基づいた議論が展開されました。1 日目の総括ディスカッションでは、さまざまな植物を利用していた人々が最終的に稲作中心の生業戦略に移行した理由について、人口圧、社会的規範、生態学的理由などが提示され、活発に意見が飛び交いました。



2 日目は、午前・午後にかけて第三部「東南アジア、南アジアおよび東アジアへの稲作の伝播」のテーマのもとに発表が行われました。午前中はカジャレ氏よりインド初期稲作研究現状の報告、マデッラ氏より社会論としてみたインドへの稲作導入が論じられました。昼休みに、ヨガ講師の資格ももつカジャレ氏

をインストラクターに行ったヨガ教室は、地球研の多くの職員が参加くださり、大好評でした。午後はウェーバー氏のインドのミレットとコメの栽培の関係、武藤氏のラオスにおけるモチ性インディカ米の起源、安氏の韓国における稲作の起源の議論が展開され、締めは佐藤氏が穀物栽培過程における雑草種の重要性を熱く論じました。総括ディスカッションでは、インディカとジャポニカの起源、インドの稲作導入に関わる謎の部分などについて議論が盛り上がりました。

地球研を会場とした小規模なシンポジウムではありますが、客席には国立民族博物館、奈良文化財研究所、早稲田大学から来ていただいた方々や、ケンブリッジ大学大学院の学生さんの顔も見られ、賑やかな 2 日間となりました。気心知れた研究者たちが集まって、シンポ前夜、懇親会、打ち上げと、「夜の部」も盛り上がりました。前回も今回も、和気あいあいとした楽しい雰囲気の中で、自由闊達に議論を繰り広げられるのが、佐藤プロ植物考古学シンポジウムの一番の魅力だと思います。



盛り上がる打ち上げ会